

令和3（2021）年度の診断テストをふりかえって

第60回を迎えた社会科診断テストも、各学校、先生方のご協力をいただき、11月30日をめぐりに実施することができた。その後、各校から寄せられたアンケートや抽出したデータをもとにコンピューター処理を行い、分析・考察を加えまとめたものを、奈良県小学校教科等研究会社会科部会のホームページ上にアップした。

奈良県小学校教科等研究会社会科部会では、研究テーマとして「社会がわかり、よりよい社会の在り方について問い続ける力を育てる社会科学習―見方・考え方を働かせてねり合い、選択・判断する学習を通して―」を掲げた。「よりよい社会の在り方について問い続ける力」とは、‘確かな社会認識’‘主体的に問題解決に取り組む姿勢’‘問題解決力’を兼ね備えた力である。参画する力の育成にあたっては、学びを育てる基礎・基本の力を充実させることが何よりも大切である。

そこで、今年度の診断テスト作成にあたっては、「社会科の基礎・基本が明らかになる診断テストの研究と問題開発―指導と評価の一体化をめざした観点別評価テストの開発―」をテーマに、何を学習したのかではなく、社会科の学力としてどんな力がついたのかを診断することに基本を置きながら、学習指導要領の趣旨に沿った問題作りに取り組んだ。

1. 今年度の研究のポイントについて

今年度は、これまでの研究の成果を基礎に、以下の点を研究のポイントとした。

(1) 学習指導要領の内容に沿った問題作り

現行の学習指導要領に沿って新しい観点に合わせた問題作りを進めているが、その問題のあり方、内容、出題方法等の深化を図る。

(2) 全学年を見通したテスト問題の構成・検討

社会科学習の成果をより詳細に、そして正確に評価できるよう取り組む。そのために、全学年を通して傾向をつかみ、分析できるようにする。

(3) 「基礎・基本」と「活用」の2種類の問題を出題

A 「基礎・基本」の問題

身につけておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能などを中心とした出題。本年度は学習指導要領に合わせ、「知識」「技能」を「知識・技能」として統一し出題した。

B 「活用」の問題

知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立

て実践し評価・改善する力などにかかわる内容を中心とした出題。

「思考・判断・表現」の問題

- ・問題発見力を問う問題
- ・複数の資料をもとに選択する問題
- ・資料をもとに自分の行動について記述する問題
- ・複数の資料を用いて関連を説明する問題
- ・選択理由や社会的影響を記述する問題

(4) 記述式解答問題について

「思考・判断・表現」の問題で「なぜ疑問」を作る記述式解答形式を採用している。

学習指導要領の中で示されている「関連を説明したり、自分の考えを論述したりする力」を診断するために、選択理由を記述したり、自分の考えを説明したりする問題を取り入れる。

(5) コンピューター処理による分析

- ・コンピューター処理による分析を考慮して作問を行う。
- ・これまでの誤答分析の結果を踏まえた作問を行う。

(6) 追跡調査による詳細な誤答分析

児童が、なぜこのような解答をしたのかを直接聞き取ることで、数量的データでは読み取れない児童の思考過程を把握し、誤答分析に生かしていく。各学年、各観点で、追跡調査する問題を特定し、抽出児童に直接聞き取ることで明らかにする。

(7) 複合的な分析

それぞれの観点別に分析をするとともに、他の観点との関連性を分析していく。

(8) 児童が取り組みやすいテストの形式

より児童がテストに取り組みやすくするために、3年前よりA3一枚表裏のテスト用紙に変更している。またテスト全体の構成や、資料の大きさ、配置について考慮した。

ここでは、研究のポイントを考慮して、全学年の総括を加えていきたい。なお、大問ごとの詳細な分析・考察は、本報告書の各学年の項に示されているので、あわせて参照いただければ幸いである。

(各学年の結果の中には、何校かを抽出して追跡調査したのものが、この表と数字が異なる場合がある。)

2. 「基礎・基本」の問題について

学習指導要領では、「地域や我が国の国土の地理的環境，現代社会のしくみや働き，地域や我が国の歴史や伝統と文化を通して社会生活について理解するとともに，様々な資料や調査活動を通して情報を適切に調べまとめる技能を身に付けるようにする。」とある。これまでから，本診断テストにおいてそれらが確実に習得されているかを診断することに重点を置き作問してきた。ここではその「知識・技能」を診断する問題を，「知識」と「技能」に関する問題に分け考察する。

①「知識」の問題について

「知識」の問題について，各学年別の問題数と正答率を表したのが次の表である。

各学年の内容別問題数と正答率

出題内容	3年生	
	地図記号	問題数
正答率		82.3%
公共施設	問題数	1
	正答率	76.7%
安全なくらしを守る工夫	問題数	1
	正答率	81.8%

出題内容	4年生	
	ごみの処理の仕組み	問題数
正答率		37.1%
自然災害から人々を守る工夫	問題数	2
	正答率	56.9%

出題内容	5年生	
	日本の国土と周辺の国々	問題数
正答率		65.1%
食料生産	問題数	1
	正答率	61.6%
自動車工業	問題数	2
	正答率	86.2%
日本の米作り	問題数	1
	正答率	89.2%
都道府県の名称や位置（共通）	問題数	4
	正答率	70.1%

出題内容	6年生	
	日本の政治のしくみ	問題数
正答率		59.8%
天皇中心の国づくり	問題数	1
	正答率	72.0%
貴族の世の中	問題数	2
	正答率	74.8%
武士の世の中	問題数	2
	正答率	62.4%
都道府県の名称や位置（共通）	問題数	4
	正答率	63.7%

まず3年生の「地図記号」を問う問題の正答率は82.3%であった。様々な地図記号に親しみ，読み取るだけでなく，正確に記述させる学習も取り入れ，定着するように指導を工夫していきたい。

次に，「都道府県の名称と位置」を問う問題である。4問の平均正答率は，5年生で70.1%，6年生で63.7%となった。5・6年生で共通問題であったが，5年生よりも6年生の正答率が低くなった。さらに「奈良県」と答える問題の正答率は，5年生が93.5%，6年生が93.0%であった。自分たちの住む奈良県の位置はもちろんのこと，全47都道府県の位置と名称をきちんと答え

られるよう、地図帳を活用し、学習した場所を調べるなどの学習活動が必要である。また、学習指導要領が本格実施となってからは、3年生以上で地図帳を使った指導が求められている。3年生、4年生での地図帳の活用にとどまらず、4年間を見通して、様々な教科の中で地図帳を活用し、継続した指導を行っていききたい。

最も正答率が低かったのが、4年生の「ごみの処理の仕組み」の用語を記述する問題で37.1%となっている。正答である「分別」や「3R」は「ごみの処理の仕組み」について理解するために重要な用語である。用語とともにその意味についても理解を図りたい。

その他の「知識」の問題については概ね6～9割前後の正答率である。それぞれの考察については各学年の項において述べているが、今後も、指導者がこの結果を参考にしながら、多様な学習形態や学習内容の工夫に取り組んでももらえればと考える。

次に、出題形式別に分類したのが下の表である。

出題形式別の問題数と正答率

問題の種類		3年生	4年生	5年生	6年生
正答を選択する問題	問題数	4	1	3	6
	正答率	79.3%	81.0%	81.2%	62.1%
正答を記述する問題	問題数		3	7	5
	正答率		35.6%	67.5%	68.3%
正答を線で結ぶ問題	問題数	5			
	正答率	90.6%			

この表を見ると、正答を記述する問題の方が、正答を選択する問題よりも正答率が低い傾向となっている。ただ暗記するだけでは、知識は定着しにくく、用語を使ってまとめを書かせるなどして知識の定着を図りたい。また、選択する問題では、「織田信長が行った政策」や「自動車工場の仕組み」など人物や社会的事象について理解しているかを図る問題を出題している。単に用語の定着に終始せず、用語と用語を関連付けたり、説明したりする活動を通して知識の定着を図りたい。

正答を線で結ぶ問題については、前回同様正答率が高く、90.6%であった。曖昧に覚えている知識でも、ある程度の情報と情報があればつなぎ合わせることができることが分かった。

今後も様々な出題形式をとり、知識がどれくらい定着しているかを判断していきたい。

②「技能」の問題について

従来は「資料活用能力」、「読図」と観点を設定してきたが、今年度から学習指導要領に合わせて「知識・技能」と観点を設定した。しかしその中でも、本診断テストが大切にしてきた「資料活用能力」「読図」に関する技能を診断することに力点を置き、問題解決的な学習の基礎となる技能の育成を目的にしている。「資料から分かることを読み取る力」、「資料の中から必要な要素を抜き出す力」などは、資料活用能力の基礎をなすべきものと考えている。

資料別の問題数と正答率

問題の種類		3年生	4年生	5年生	6年生
グラフを活用する問題	問題数			3	
	正答率			77.7%	
地図を活用する問題	問題数	4	7	2	3
	正答率	74.9%	73.5%	45.7%	80.9%
絵や図、表を活用する問題	問題数	2	4		2
	正答率	65.2%	77.8%		77.0%

資料別の問題数と正答率からは、特に5年生の地図を活用する問題の正答率が低かった。「我が国の位置と領土」について問う問題で、緯度経度を用いて地点を表す問題であった。学習指導要領の中には「…緯度や経度等を使って位置を説明したりする活動が考えられる。」と例示されていることから、定着するように指導を工夫したい。また、アンケートから「地図帳で他の都市を探すことに時間がかかった。」「地図帳の活用回数が少なく、児童が慣れていなかった。」などの意見があった。学習指導要領では、3年生から地図帳を扱うとなっており、地図記号や四方位、索引、統計資料の活用の学習から4年生では奈良県の周辺や47都道府県の様子など、基本的な地図帳の使い方を継続して指導することが望まれる。

社会科において、資料は地図、グラフ、絵や図、表など様々な種類がある。また、それらを複合した資料も多い。それらを関連付けたり、比較したりすることで新たな発見があったり、社会的事象の理解につながっていく。学習においては、それぞれの資料の特性に合わせた読み取り方を意識的に指導していく必要がある。たとえば絵や図では、全体から受ける印象と細かい部分の両方に着目し、気付いたことをノートに記述させる、といった指導が考えられる。また地図では方位を確認したり、地形や土地利用などを読み取ったりする活動が重要である。グラフでは、表題をはじめ、縦軸や横軸、単位などを確認し、年次的な変化などの読み取りができるよう丁寧に指導していきたい。

「技能」は、後述する「思考・判断・表現」の観点にも大きな影響を与えている。地図帳や地球儀、統計資料や年表など様々な資料を読み取り、問題を発見し解決していくことで社会科の授業は展開され、思考力・判断力・表現力が醸成されていく。そうした意味でも「資料活用能力」

「読図」の技能は社会科において重要な能力である。日々の授業の中で、多くの資料に触れ、適切に読み取ることができるよう普段から意識して指導していきたい。

3. 「活用」の問題について

新学習指導要領では、「社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考えたり、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断したりする力、考えたことや選択・判断したことを適切に表現する力を養う。」とある。このような「思考・判断・表現」の力を診断するための問題を「活用」の問題として設定した。また、同時に「社会的事象について、よりよい社会を考え主体的に問題解決しようとする態度を養うとともに、多角

的な思考や理解を通して、地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚、我が国の国土と歴史に対する愛情、我が国の将来を担う国民としての自覚、世界の国々の人々と共に生きていくことの大切さについての自覚などを養う。」とも述べられている。今年度の「活用」の問題では、このような「主体的に学習に取り組む態度」を育成する、という視点も意識しながら問題の作成を行った。

「活用」の問題とは、「知識・技能」等を様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力などに関わる内容を中心とした問題である。本年度は、新指導要領実施に合わせて全面改訂を行い、以下のような問題を作成した。

- ①問題発見力を問う問題 ②複数の資料をもとに選択する問題
 ③資料をもとに自分の行動について記述する問題 ④複数の資料を用いて関連を説明する問題
 ⑤選択理由や社会的影響を記述する問題

記述問題である①③④⑤を中心に分析を行った。まずは「問題発見力」を問う問題から考察したい。各学年の問題内容と正答率は以下の通りである。

問題発見力を問う問題の内容と正答率

	問題の内容	資料の数と種類	正答 (%)	誤答 (%)	無記入 (%)
3年	スーパーマーケットの「地産地消」の看板の資料を見て問題を見つける。	1点 (画像)	70.9	29.1	5.1
4年	「奈良県全体の人口」と「香芝市の人口」の推移を表すグラフを見比べて問題を見つける。	2点 (グラフ)	61.2	38.8	15.8
5年	「漁業者一人当たりの生産量」と「日本の漁業生産量」のグラフを見比べて問題を見つける。	2点 (グラフ)	74.7	25.3	9.3

(上記の結果は、何校かを抽出して追跡調査したものです。)

これまでの診断テストでも明らかになっているように、資料を読み取り問題を発見する力が低いことがわかる。今年度についても6割～7割前後という結果となった。この問題の正答率が低い原因は以下のようなことが考えられる。まず、資料を読み取ることができていない、ということである。資料の内容について理解していなければ、問題を発見することはできない。例えばグラフであれば、まずは表題や縦軸、横軸、数値を確認し「何を表しているグラフなのか」を理解させる必要がある。次に全体を見て、「増えている」「減っている」など大まかな傾向を理解させることが必要である。また、急激に変化しているところなど、局所的な変化もおさえない。このように一つ一つ丁寧に指導しながら資料に慣れさせていくことで、正答率は上がっていくと考える。

また発達段階に応じて、児童が読み取りやすい資料の種類や、数についても留意することも重要である。3年生では1点の画像資料を使う問題で正答率は70.9%、4年生では2点のグラフを使う問題で正答率は61.2%であり、約10ポイントの差があることがわかる。また資料の種類と数が同じであった4年生と5年生について比べると、4年生の正答率が約13ポイント低いことがわかる。これは、児童の発達段階と、資料の種類、数の関係に原因があると考えられる。画像とグラフで

は、画像の方が読み取ることは比較的容易であり、複数の資料よりも一つの資料から問題を見つける方が容易である。以上のことより、社会科の入門期である3年生は、比較的読み取りやすい画像・図版資料を、数に留意しながら活用する。そして、学年が上がるにつれて地図やグラフ、またそれらの組み合わせなど複数の資料を活用し、問題を発見する場面を設定していく。このように資料の種類や、数について留意しながら学習を進めていくことで、児童が無理なく社会科の学習に取り組み、問題発見力を身に付けていくことにつながると考える。

問題発見力は、社会的事象に関心をもち、主体的に問題解決的な学習を進めるためには必要不可欠である。まずは学習の中で、写真や表、グラフなどさまざまな種類の資料に触れさせることを心がけたい。そして資料の読み取り方を丁寧に指導するとともに、自分たちで問題を発見し解決する学習体験を積み重ねていくことで、児童の問題発見力は向上すると考える。今後も多種多様な資料を用い、様々な問題を発見する力を高めていくことを意識していかなければならない。

次に、「資料をもとに自分の行動について記述する問題」について考察したい。各学年の問題内容と正答率は以下の通りである。

資料をもとに自分の行動について記述する問題の内容と正答率

	問題の内容	正答 (%)	誤答 (%)	無記入 (%)
3 年	児童の会話をもとに、自分たちが守るべき交通ルールについて考え、記述する問題。	55.2	44.8	2.9
4 年	家族の会話をもとに、自然災害の被害を小さくするために自分たちができることについて考え、記述する問題。	65.8	34.2	11.2

(上記の結果は、何校かを抽出して追跡調査したものです。)

この問題は、従来の「思考・判断・表現」に加え、学んだことを実生活に生かそうとする姿勢についても意識しながら作成した問題である。3・4年生ともに正答率は6割程度にとどまり、課題が出た結果となった。最も多かった誤答は、4年生で「論述が明確でないもの」、3年生では「具体的な記述がないもの」であった。2つの学年の誤答の傾向から見られる共通点は、「具体的な行動について記述できていない児童が多い」ということである。例えば、3年生であれば「車に気を付けて歩く」、4年生であれば「命を守る行動をする」などといった解答である。この結果から、学習した内容が自分たちの行動レベルまで浸透していない児童が多いことがわかる。警察・消防、水道、ごみの処理、防災など、中学年の学習は実生活につながっている内容が多い。内容を理解して終わるのでなく、学んだことを活用して社会的な課題について議論したり、自分たちにできる具体的な行動について考え、実践したりする授業展開が必要である。そうすることで、自分の行動について、具体的な記述ができる児童の割合が高くなると考える。

次に、「複数の資料を用いて関連を説明する問題」について考察したい。各学年の問題内容と正答率は以下の通りである。

複数の資料を用いて関連を説明する問題の内容と正答

	問題の内容	正答 (%)	準正答 (%)	合計 (%)
4年	「奈良県の平均気温」と「奈良県の交通の広がり」の2つの資料を使って「いちごづくりがさかんな場所」について記述する問題。	43.7	18.4	62.1
5年	「東京都の市場でのキャベツの月別取り扱い量」と「奈良市と孺恋村の月別平均気温」の2つの資料を使って「孺恋村のキャベツづくりの特色」について記述する問題。	38.0	25.0	63.0
6年	「A市に住む人の会話」と「住民の願いが実現するまでの流れ」の2つの資料の関連を記述する問題。	46.2	36.9	83.1
	「幕府と武士の関係図」と「元との戦い」の2つの資料を使って、「鎌倉幕府の力が衰えた理由」について記述する問題。	45.8		45.8

(上記の結果は、何校かを抽出して追跡調査したものです。)

どの学年も「複数の資料を用いて自分の考えを記述する問題」で、正答率は4割～5割程度、準正答も含めると学年によって大きく異なるが、6割～8割程度であった。

まずは、正答、準正答の合計の正答率の低さについて考察したい。この結果から、全体の半数近くの児童は、誤答であったということがわかる。この原因は、資料を読み取る力が不十分であることが考えられる。例えば、4年生の大問6では、「奈良県の交通の広がり」について「交通が発達していて人口が多いから、いちごもたくさん作られている」といった解答が見られた。また6年生の大問5では「幕府の力が衰えていった原因が捉えられていないもの」や「資料の読み取りができていないもの」「問題とかけはなれたもの」といった解答も多かった。これらの解答は、資料が示す社会的な意味を正しく読み取れていないことを表している。

次に着目したいことは準正答の割合の高さである。どの学年も2割～4割の児童が準正答であり、一つの資料を使うことはできているが、複数の資料を関連付けて説明するのが苦手な児童の実態が浮かんでくる。例えば5年生の大問6では、「奈良市と孺恋村の月別平均気温」の資料のみを使って記述している児童が21.7%見られた。また6年生の大問2も同様で、A市に住む人の願いを叶えるための施設については記述できているが、それを政治の働きと関連付けて記述できていない児童が多く見られた。

また、どの学年でも論述が明確でなく誤答となっている児童が目立った。自分の考えを記述するときや、説明するときには、語句や用語だけでなく、正しい文章で、相手に伝わるよう意識させる必要がある。

以上をふまえ、資料が表す意味を丁寧に読み取る、複数の資料を関連付けて考える、またそれらを用いて自分の考えを論述させる、といった学習活動を充実させていく必要があると考える。普段から、様々な角度から考えを深め、資料を社会的な事象と関連付け、学習した内容を総合的にとらえられるようにしたい。

次に、選択理由や社会的影響を記述する問題について考察したい。各学年の問題内容と正答

率は以下の通りである。

選択理由や社会的影響を記述する問題

	問題の内容	正しい資料を選択・解答できたもの(%)	正答(%)	誤答(%)
5年	圃場整備と関係の深い資料を選択し、その理由について記述する問題。	89.2	53.3	46.7
6年	豊臣秀吉によって行われた検地によって、百姓が受けた影響について記述する問題。	49.6	44.1	55.9

5年生は、89.2%の児童が正しい解答である「大型機械」を選択できたが、その理由について適切に記述できたのは53.3%であった。「大型機械」を選択した理由として、「大型機械を使って圃場整備していると思うから。」という解答が多く見られた。2つの資料の関係性を誤った認識でとらえた児童が多いことがわかる。「圃場整備」や「大型機械」が農業の効率化にどのような役割を果たしているのか、正しく理解できていないことがうかがえる。また6年生は、「検地」と解答できた児童が49.6%で、その社会的な影響について正しく記述できた児童は44.1%であった。「検地」という用語について理解している児童の多くは、他の資料（ものさし、ます、測量のイラスト）と関連付けて、その影響について正しく記述できていることがわかる。このことから、単元のキーワードである用語は、児童の「思考・判断・表現」の基礎になることがうかがえる。指導者が授業をデザインする際に、その単元で確実に習得させないといけない用語は何なのか、またそれらを使ってどのような概念を捉えさせないといけないのか、しっかりと見極めることが重要であると考え。以上のことから、選択理由について正しく記述するためには、まずはその資料に関わる正しい知識が必要であることがわかる。そして、それらをバラバラの知識ではなく、関連付けて構造化し、概念的な知識にしていくことが重要であると考え。そのために、ただ用語や語句を覚えさせたりするだけでなく、それらを使って説明させたり、議論させたりするなどして、知識を構造化し、社会的事象の意味や背景についてとらえさせていくことが必要であると考え。

ここまで「活用」問題について考察を行ってきたが、テストから見えてきた課題を踏まえ、以下のような改善点を提案した。

- グラフの読み取り方など、基礎的な技能を養うこと
- 児童の発達段階に適した資料（種類・数）を授業で使うこと
- 学んだことを活用し、自分たちの行動レベルまで考える授業を展開すること
- 知識を関連付けて構造化すること
- 複数の資料を用いて自分の考えを表現する場面を設定すること

これらのことを考慮しながら、普段の授業を積み重ねていくことで、児童に「思考・判断・表現」の力を養うことができると考える。

アンケート集計結果について

社会科診断テストについてのアンケートにご協力いただき、ありがとうございました。

1. 「学習内容と合っていますか」について

学習内容と診断テストの内容については、概ね「だいたい合っている。」との回答を得ており、適切であったと考える。活用の問題においては、既習事項だけにとらわれず学習したことを活用して問題を解くということも考慮して問題を作成していきたいと考えている。

2. 「学習の進捗と合っていますか」について

学習進捗と診断テストの内容については、ほぼ「合っている。」の回答を得たが、3年生において、「安全な暮らしを守る」問題について「未習である」という回答があった。本診断テストの作成にあたっては、「奈良県小学校指導計画の手引き」に準拠して出題範囲を決定しているが、各校の指導計画やその実施に差があったりすることから、未習の問題が生まれることがある。この場合、時期を少しずらして実施していただいてもよいのではないかと考える。今年度頂いたご意見を参考にしながら、問題を作成していきたい。

3. 「問題文などの表記」について

本診断テストでは、該当学年で学習した漢字と未習の漢字にはふりがなを入れ、前学年までに学習した漢字にはふりがなを入れない形で統一してきている。「問題文が長い」という回答は以前に比べて減ってきているが、「国語力に左右される。」といった意見をアンケートでは頂いた。問いの場面設定や問いの意図を正確に伝える必要性から、問題文を今以上に簡潔にすることは難しい面もある。児童の読解力の低下が指摘される中、どの学年においても、問題作成の際には、できるだけ平易な文で簡潔な表現を心がけているが、今後も児童の発達段階に合った問い方、答え方を考慮しながら問題を作成していきたい。

4. 「資料」について

それぞれの学年で「資料が難しい。」という回答が見られた。複数の資料を読み取り、それらを使って表現する、という問題が難しかったようである。しかし、複数の資料を比較・検討して考えることは、社会的意味を正しく理解していく上で基礎的な力である。その力を正確に把握できるように、さらに資料の厳選や配置、レイアウト、問題文の工夫などに努めたい。

5. 「実施時間」について

今年度も、各学年でほぼ時間内に実施できたとの回答をいただき、実施時間は適切であったと考える。今後も、児童の発達段階をふまえ、問題数と実施時間のバランスを考えながら問題を作成していきたい。

6. 「社会科の授業は好きですか？」

アンケートに協力いただいた指導者自身の社会科に対する意識として、「好き」が4割程度、「普通」が5割程度、「嫌い」という回答も数%見られた。好きな理由としては、「調べて学ぶ子どもたちが生き生きしているから」、「教材研究は大変だけど、新しい発見をしたとき子どもたちがとても喜んでくれるから」、「学習を通して地域への愛着がわくから」、「タブレットを使って自分たちで調べることが子どもたちが楽しんでいるから」といった回答が見られた。反対に嫌いな理由としては、「子どものころから苦手はどうやって教えたらいいかわからない」、「子どもが自ら考える展開にするのが難しいから」、「教材研究に時間がかかるから」といった回答が多かった。これらの結果を受けて、今後は主題研究部とも連携して、指導者の意識調査や社会科の授業づくりといった内容も考えていければと考える。

7. その他

昨年度はコロナ禍のテスト作成・実施を行うことができなかったが、今年度は新学習指導要領に合わせて全学年で全面改訂を行い、中学年では「主体的に関わる態度」を意識したり、6年生では政治単元の問題を作成したりと、新たな試みをすることができた。今後も診断テストの作成、実施、分析を通して授業改善を提案し、奈良県の子どもたちの社会科の力を養っていきたい。